
もう一人の自分

K I D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の自分

【Nコード】

N3871I

【作者名】

KID

【あらすじ】

暗い部屋の中に、彼は一人で居た。身動きが取れず、約一年間密かに生きていたもう一人の自分。そこで彼が待ち望んでいるのは『ここから消えられる』という希望……。だが……。それは本当に望んでよいもののだろうか？自分と同じ立場の幼い少年の話を聞いて、白い怪盗はわずかな時間の中、悩み続ける……。自分の中に潜むもう一人の自分の話を、今回は短編で書きました。登場人物はキッドとコナンですが、中心はキッドです。興味があったら読んでください。

（前書き）

二回目の短編ですので、何かと失敗があると思います。ご了承ください。

（ちなみに、こちらも学校に行く途中で思いつきました・・・。）

暗くほぼ何もない部屋に、私は一人、息を潜めていた。
周りは見渡す限り埃まみれで、私の自慢の白い衣装も、もうほとんど汚れ切ってしまったている。

一体どれくらい・・・、私はここに閉じ込められているのだろう・・・。
ふつと気が付けば、もう数え切れなくらいの時間・・・、ここにいた。

私の両手や両足、首元には、かなり長めの鎖の付いた枷が掛けられている。
それも、よく耳にする手錠とは全く違い、かなり頑丈なモノ・・・。
その為、私はこの場から身動きを取る事が一切出来ない。
だからいつも・・・、私は下を向いたまま、まるで死んでしまった人のように動かないのだ。
と言うよりも、そもそも動く気になれない・・・。

コイツ
枷を自分で外すことが出来たら・・・、私はどれほど嬉しいだろう
か・・・。

そんな叶わない夢を、私は時々望んでしまう。
丁度私の近くの壁に、その枷を開けるカギが吊るしてあった。
が・・・、とてもこの状態で、カギのある方に動けるはずがない。

勿論・・・、手だって届かない・・・。

それに・・・、その力ギを手にとってこの枷を外せる人物は、私に
対してたった一人だけ・・・。

そのたった一人の人物が、かれこれ一年近く、枷の力ギを外しに来
ていないのだ。

だから・・・、私には分かる・・・。

もうここには来ないのだ、と・・・。

「フ・・・。どうせ外す事がないのであれば・・・、早く私の事を
忘れればいいのに・・・。」

いや・・・。

どうせなら・・・、忘れてしまっただけ・・・。
ここに閉じ込められている事が、今の私には一番辛く・・・、そし
て・・・、一番苦しい・・・。

私のいるこの場所の名は『もう一人の自分の墓場』・・・。

分かりやすく言えば、自分の中に住み着いているもう一人の自分を
捨てる。

または閉じ込める場所だ。

そしてここに閉じ込められた者は、その者達を作り出した人物自身の判断で、最終的には消されるか、あるいはそのまま残り続けるかのどちらかに決まる。

残り続ける場合は、私の様に体のあちらこちらに枷を付けられ、身動きが取れないようにされる。

消される場合は、彼らを作った人物が『もう思い出したくない』または『もう〇〇にはならない』と強くそう思ったと同時に枷が外れ、一時的に自由になってから消える。

今の私が望んでいるのは、その消される方だ・・・。

大概、そう言った者達の半数は空想の様なもので、実体を持つ事はないが、時々その例外が存在する事がある。

その一人が、私のような者だ。

普段はただ、同じ学校の同級生達とふざけ合っている高校生だが、一度仕事となると、白い衣装を身に纏った、キザな怪盗になる。ここに閉じ込められている私は、その怪盗の時の姿・・・。

そう・・・。

例外とは、言わば『二重人格』のような者の事である。

私の場合は、高校生活を送っている彼が本当の姿・・・。

だから、私はここに閉じ込められているのである。

彼が私になったのは、尊敬していた父親の仇打ちをするため……。それが達成できてから、かれこれ一年は経つ……。

もう彼が怪盗になる必要がないというのに、私がまだここにいる理由はただ一つ……。

彼が私の存在を、未だに脳裏から忘れる事が出来ないから……。まだ多少の心残りが、彼の中にあるからだ……。

それさえ捨てられれば、私はこの場所から出られるのに……。一時的に自由になって、この世からも……。そして、この場所からも消えられるのに……。

私の両手首は、この枷を外そうと暴れたせいで、濃い色の痣が出ている。

枷が付けられている理由は、もう一人の自分である私達が、下手な事で暴走しないため……。

言わば普通の人達で言う『犯罪を犯す前のストッパー』のようなモノなのである。

半分青紫色に変色した自分の手首を見ると、まるで今の自分自身の情けない姿を直視しているように感じて、思わず顔を下に伏せた。

今までと同じように……。

「随分とブザマな姿だな・・・」

突然、私の丁度前の方から、かなり幼い少年の声が聞こえてきた。誰なのかは、顔を見なくとも分かっている・・・。

「やれやれ・・・。名探偵にまでそう言われてしまうとは・・・、情けないですね・・・」

私は顔を下に向けたまま、力無く返事を返した。

彼ももう一人の自分自身の姿として、ここに閉じ込められていた。それも、彼も私と同じく例外の存在である。

ただし、私とは全く違う場所にいたので、会話をする事は滅多になかった。

唯一会話出来る機会があるのは、彼の体が『工藤新一』に一時的に戻って、再びここに閉じ込められに来た時と、解毒剤の効き目が切れて、再びあの幼い姿に戻らされる時の2回だけ・・・。

ここは彼らのように、一度出される者と入れられる者の通り道になっっているので、彼がここに帰ってきた時には、よく顔を合わせていた。

だが最近では、完成した解毒剤の関係もあって、彼は私と同じく、ここにずっと閉じ込められたままになっていた。そのせいで、また話せる機会が減っていたのだ。

いや・・・。

その前に、話す機会がなくなってしまうていたのである。

すぐにそんな彼がここにいる事を疑問に感じた私は、顔を一気に上に上げた。

そこには、体に掛けられていた全ての枷が外れ、一時的に自由になった名探偵アイツがいた。

「どうして・・・？ 解毒剤を服用したんですから、もう『江戸川コナン』の体には・・・」

「その元に戻った後の『工藤新一』が、自分の過去の姿を振り返らないと決めたらしいんだ・・・。たぶん・・・、蘭との今まで通りの生活を取り戻したから、もう俺は関係ないって事だろーな・・・」
半分寂しそうな顔をしながら、彼は私と同じく、ほぼ青痣だらけの自分の手首を見ながら言った。

そんな彼に対して、私は何も言えなかった・・・。
ただただ、そつと見つめているだけ・・・。

と、その時。

「あっ・・・」

いきなり聞こえてきた名探偵の声に、私は半分下ろし掛っていた顔を、再び上に上げる。

そこで私の視界に写ったものは、徐々に透き通って消えてゆく名探偵ライの姿・・・。

「名探偵っ!!」

ガチャッ!

「っっっ!!」

とっさに彼の体に向かおうとした途端、私は現実に取り戻された。

自分の両手や両足に付けられていた枷が邪魔をして、全く前に進めない。

いきなり襲ってきた激痛に顔を歪めながら、私は自分の手首を見た。

青紫色になってしまった手首からは、ドス黒い血が流れ出している。

もう一人の自分だというのに、血が流れた……。

快斗^彼がいたら、きっと苦手な血を見て騒いでいただろう……。

その性格が多少移っているのか、私もその血を見たくなくて、徐々に消えてゆく名探偵の方を見つめた。

本当の自分が私達を忘れるという事は、ここにいるもう一人の自分を消すということ……。

最初に覚えたはずの事なのに、気が動転して忘れていた。

「何も……、感じないのですか……?」

最後にこれだけ、どうしても聞きたかった……。

だから、彼に問い掛けた。

自分もいずれ、彼と同じ道に進む定め^{運命}にある……。

だからこそ、消える間際の事を知りたかったのだ。

名探偵はそんな私の問い掛けに、一瞬『えっ?』という表情を浮かべると、その後で静かに答えた。

「ああ……、何も……。唯一感じるとしたら……。『寂しさ』かな……。?」

その彼の意外な答えに、今度は私の方が『えっ?』という表情を浮かべる。

やっとここから出られるのに……。

消えられるのに……。

何が悲しい……?

何が寂しい……?

ワカラナイ……。

「だってさ……。考えてみるよ? やつと元の体に戻れたら、その途端……。もう一人の自分の存在を、自分の記憶の中から消す……。悲しいと思わないのか……。? ずっと、その体で暮らしていたっていうのに……。生きていたっていうのに……。自分自身が情けねーよ……。」

「名探偵は……。『工藤新一』に自分の事を忘れ去られるのが……。もの凄く悲しいんですね……。?」

こっちは早く、忘れ去られたいというのに・・・。

私がそう思っていると、名探偵はさらにこんな事を口にした。

「お前はいいよ・・・。忘れられる事がなくて・・・。」

「な・・・、何言ってるんですか！？ 名探偵・・・？」

私がいい・・・？

何処が・・・？

私は早く、彼から忘れ去られて・・・。

「なあ、キッド・・・。お前は早く、本当の自分自身に忘れられた
いんだろ？が・・・。俺はそうは思わねーよ・・・。よく言うだろ
？ 『人は自分の過去を振り返らない』って・・・。その時の記憶
を思い出す事はあっても、それを再び繰り返そうとしたり、深く考
えたりはしない・・・。それは俺達からしてみれば、過去の俺達は
すぐに消して、今の自分の姿を中心に動こうとしているようなもの
・・・。つまり・・・、すぐに忘れられっちまうんだよ・・・。俺達
の事は・・・。」

「名探偵は『本当の自分自身が、私達を殺そうとしている』・・・。
そう言いたいのですか？」

私が苦笑いを浮かべながら言うと、名探偵ははつきりと笑わずに、
その場で頷いた。

「ああ……、だけど……、お前自身の人間は違う……。何もするにしても、過去の自分を忘れようとはしない……。本当に正しいのは……。そういう人間の方なのかもしれない……。」

私はそんな名探偵の話を聞いて、思わず言葉を詰まらせた。

本当は訊きたかった……。

『その間、私達はこの状態のままなのか』と……。

『自分に忘れ去られる事は、一生ないのか』と……。

『その方が、もう一人の自分は幸せなのか』と……。

それを訊く前に、名探偵の体はこの場所から、完全に消え去ってしまった。

ここに閉じ込められている間、何かしらで彼と話をしていたが、もうそれも出来ない……。

もう完全に、私は一人になってしまったのだ。

（名探偵……。『一人だけ』というのも、結構寂しいですよ……。）

私はそう胸中で呟くと、何もない天井を見上げた。

ここはいつも夜……。

ある種の考えでは、どこまでも続く暗い闇だと言つ者もいるだろう。そんな暗い夜空を見上げながら、もう届かないと知っている彼に向かって、私は呟いた。

「あなたにとって、私は必要な存在だったのですか・・・？　許せない犯罪者だったのでは、なかったのですか・・・？」

私の呟きは、ただの独り言に過ぎない・・・。

彼には絶対に、届かないのだから・・・。

私は静かに目を閉じると、ただ口だけを開き、続けてこう呟いた。

「分かりました・・・。あなたが私の事を忘れるまで・・・、私はここで生きるとしましょう・・・。あなたの中にいる・・・、もう一人の自分として・・・。」

それだけを言うと、白い怪盗は顔を下に向け、それっきり動かなくなっただけ・・・。

自分の足元を少しずつ、瞳から流れるモノで濡らしながら・・・。

そして、それから数日後・・・。

彼の体もまた、あの小さな名探偵のように消えていった。

心無しか・・・、彼が消える間際に感じたのは、忘れられるという『寂しさ』だった・・・。

(後書き)

ども KIDです!!

今回は二回目の短編小説になります。

ですが、最初に書いた『僕の名前のヒミツ』よりは、かなり暗い話になってしまいました。

が・・・、見てくださるだけ光栄です。

これからも長編の方、よろしくお願いしまーす!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3871i/>

もう一人の自分

2011年7月4日21時09分発行